

日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース

14

日本薬剤学会第23年会開催に向けて



◀第23年会年会長・
原島秀吉北海道大学大学院教授

日本薬剤学会第23年会が2008年5月20～22日、札幌コンベンションセンターで開催される。近年、ゲノム創薬、コンビナトリアルケミストリー、ハイスループットスクリーニングなどの急激な技術革新とともに、薬剤学研究を取り巻く環境が大きく変わりつつある。そのような中で、「21世紀の革新的薬物治療を目指して」をメインテーマとして掲げる北海道大学大学院薬学研究院教授の原島秀吉第23年会年会長が、来たる当日に向けてその思いを語る。

参加型の学会で人材を育成

原島氏は、本年会の特長として第1に「参加型の学会」をあげる。学生、若手の研究者、薬剤師が聴講のみではなく演者として積極的に学会に参加できるような場を設けることは将来の人材育成には不可欠であり、日本薬剤学会としてそのような場を提供していきたいとの思いだ。そのため今回は180もの一般口頭発表が予定されている。

さらに、本年会では新たに創剤特別賞、国際フェローの2つが加わるなど、過去最多となる多数の賞が設けられている。「次は自分の番だ」という強いバイタリティーのある人材の積極的な参加を期待すると原島氏は語る。

創薬、医薬品の適正使用、人材育成が3つの柱

また、原島氏は本年会を構成するにあたって①創薬、②医薬品の適正使用、③人材育成の3つを大きな柱としたと語る。

創薬は、これまでも日本薬剤学会の重要な課題の1つであり今回も創薬科学の基礎研究から、応用開発まで多数のシンポジウムが設けられている。日本薬剤学会がこれまで築き上げてきた創薬研究のさらなる飛躍の一步として、本年会が革新的医薬品の創生につながることを期待すると原島氏は語る。

加えて医薬品の適正使用推進も、有効で安全かつ経済的な治療の実現を目指す日本薬剤学会の重要な課題の1つとなっていると述べる。そのため、今回はFIP-BPS (世界薬学連合-薬科学部門)学術総務担当のVinod Shah氏を招聘、欧米でのジェネリック医薬品の現状について安全性、有効性、品質の観点から講演が行われる。

原島氏は「ジェネリック医薬品をどのように使用するかは新薬開発と双壁をなす重要な課題であるが、日本ではその議論が遅れている」として、日本薬剤学会としてどのように両者のバランスを取っていくか議論を尽くしていきたいと語る。

また現在、薬学部が6年制へ移行する中で、人材育成



▲第23年会のポスター

に関してその考え方が大きく変わりつつある。そのような現状の中で、研究・教育を今後どのように進めていくべきか、社会のニーズに応えた薬剤学教育とはどうあるべきか、今回も議論の場が設けられる。

そして、人材育成について原島氏が強調するのは、本年会の各シンポジウムのオーガナイザーの多くに若手を登用したという点だ。特に新たな企画として、若手研究者からなる将来ビジョン委員会主催のシンポジウムにおいて、薬剤学の新しい方向性とはどうあるべきかが議論される。今後の日本の薬剤学を担う若手研究者の試金石として原島氏は大きな期待を寄せる。

薬剤学の枠を超えて

本年会では、名古屋大学工学研究科教授の馬場嘉信氏が「ナノバイオテクノロジーが拓く未来医療」と題して特別講演を行う。「20世紀、人類は月に行くという大きな夢を達成した。21世紀は逆にナノ空間においていかに物質を制御するかが大きな目標。いまだかつて薬剤学の分野からノーベル賞は生まれていない。しかし今後ナノテクノロジーを応用した革新的薬剤治療に対してノーベル賞が贈られることは決して夢ではない。そのためには薬剤学の枠を超えた、他分野との連携、融合の実現が一層必要となる」と原島氏は期待を寄せている。